

職員に精神的ゆとりを 与える離床センサー

安全性高いコードレスタイプ

介護主任の畠中理恵さん



大阪府和泉市にある老人保健施設「プリムラ和泉」（和泉市松屋寺町330番地）は5年前、身体拘束の解消に踏み切った。問題はベッドからの転落などの事故対策。そこで離床センサーの導入を決断、現在有効に活用している。

同施設でセンサーを設置しているのは約10床。いずれもテクノジャパン製の、「ナースコールボタンが押せない方やナースコールが理解できない方などが対象です。要介護では3以上、認知症の方が多いですね」と語るのは介護主任の畠中理恵さん。また行動パターンが把握できていな

い新人所者に対しても、入所から2〜3週間使用し、夜間の行動パターンの把握に活用しているという。

センサーの種類は、大半がベッドで上体を起こしたときに報知する「ベッドコール型」。他の型に比べ、利用者のところまでかけつけるのに時間的ゆとりが確保できるからだ。さらにコード付とコードレスの両方を使用している

が、やはりコードレスの方が安全だと畠中さんは言う。「線を抜かれる心配がなく、また首に巻きつけたり、引っ掛けて転ぶといった危険性もありません」。

報知システムもナースコールに運動しているタイプと専用受信器タイプの2

種類を使用。ナースコールは1フロア全員を集約的に管理できる。しかし慣れてくると専用受信器の方がスピーディーに対応できるという。共にランプと音で離床を知らせるが、「専用受信器は人によって音色が違い、目で部屋番号を確認する必要があります。またステーションにいないくても音によってどの人がか分かり、すぐに駆けつけられるこ

とができます。事故防止には1秒でも早く部屋におもむくことが大切」（畠中さん）。

同施設では離床センサーが事故防止に大いに役立っている。しかしメリットはそれだけではないそうだ。「職員に精神的ゆとりを与えている」と畠中さんは感じている。

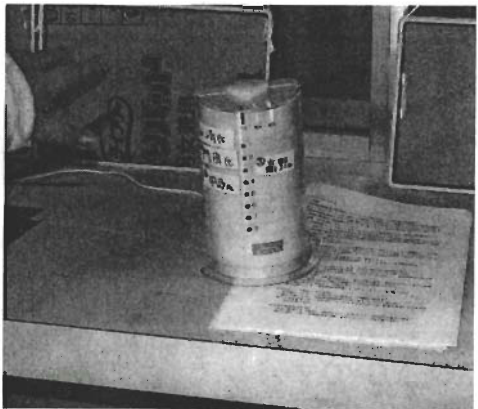
夜間の勤務は肉体的にも精神的にもハードだ。「センサーで未然に転落事故が防げる。そうした気分的なゆとりがもたらされることが、職員の日常ケアの向上にも結びついていると思います」。ただ



ベッドコール型のコードレス離床センサー

一方でセンサーに頼りきるとはよくないらしい。「事故は転落だけではありません。定期的に自分の目で異常がないか確かめることも大切ですよ」と畠中さんは念を押す。

5年前身体拘束の解消を目的に導入された離床センサー。プリムラ和泉では夜間の行動把握という新しい目的にも応用。そして何より、よりよい介護の実現という施設が本来目指すべきテーマにも離床センサーが大いに貢献しているといえよう。



音色によって入所者の区別ができる専用受信機